陳于柱著『敦煌吐魯番出土發病書整理研究』

佐々木　聰

本書は敦煌・吐魯番文獻に含まれる「發病書」と呼ばれる資料群につき、網羅的な整理・概説を試みた基礎的研究である。著者に據れば、發病書は『唐六典』卷十四・太常寺太卜署條に「凡陰陽雜占、…略…八曰發病」とあるが、「公私の書目には「發病」や疾病の占いを書名とする書物はいずれも載錄されていなかった。」という（緒論V頁）。こうした狀況に對し、敦煌吐魯番から發見された發病書は、「『發病書』が歷史上に實在し、流行していたことに對する有力な證據となるだけでなく」、「學會が中古中國における疾病史・醫療史・社會史等の領域についての理解をさらに進める一助となりうる」（同）と述べている。

また、著者は發病書を次のように定義する。「狹義には「發病書」と題された敦煌吐魯番文獻であり、廣義には敦煌吐魯番文獻中における年・月・日・時等のそれぞれの時間に病を得た場合の病狀・病因・治療・禁忌・痊癒などの狀況について占う資料である」（同）。

小稿では、以下に本書の內容を紹介し、その特徵と意義を論じてみたい。

まず目次により本書の構成を示す。本書は研究篇と校錄篇に分かれており、研究篇は「敦煌吐魯番出土《發病書》叙錄」、「敦煌寫本發病書《天牢鬼鏡圖并推得病日

法》的再研究」、「日本杏雨書屋藏敦煌本《發病書》殘卷整理與研究」、「敦煌寫本P.4732V＋P.3402V《發病書》綴合研究」、「再論敦煌寫本《發病書》中的〝代人〟」、「敦煌術數文獻所見〝天醫〟考論」、「武威西夏二號墓彩繪板畫〝藁里老人〟考論——兼論敦煌寫本《發病書》中的〝丈人〟」、「醫療社會史視野下的敦煌吐魯番《發病書》研究」の八篇を收錄する。

次に校錄篇は、①P.2856《發病書》（丸番號は評書。以下同）、②S.6196→S.6346V→羽015V→P.2978V《發病書一卷》、③P.4732V＋P.3402V《發病書・推十干病法、推得病時法、推十二祇得病法、推五行日得病法等（擬）》、④Дx.00506＋Дx.05924《推得病日法（擬）》、⑤P.3556V《推十干》、⑥S.P.6《推十干得病日法》、⑦Дx.01258＋Дx.01258V＋Дx.01259（＋Дx.04253V）＋Дx.01259V（＋Дx.04253）＋Дx.01289＋Дx.01289V＋Дx.02977＋Дx.02977V＋Дx.06761＋Дx.06761V＋Дx.03165V＋Дx.03165＋Дx.03829＋Дx.03829V＋Дx.03162＋Дx.03162V《天牢鬼鏡圖并推得病日法》、⑧S.1468《推十二時中得病日等占法抄（擬）》、⑨S.6216《推初得病日鬼法等占法抄（擬）》、⑩Дx.05193《推得病日法》、⑪P.3081《七曜日得病望、推人八卦游載所至厄法等占法抄（擬）》、⑫P.T.55《十二因緣占卜・壽元品》（古藏文）、⑬Ch.468(TID287)《推五子日病法、反支法等占法抄（擬）》、⑭Ch.1617背(TIIT3072)《發病書（擬）》、⑮「于闐文Hedin17號(A)《逐日身體不適推吉凶法》、⑯《張天師發病書》の十六種のテキストを載錄している。

研究篇はそれぞれ獨立した論文だが、冒頭の「敦煌吐魯番出土《發病書》叙錄」が本書で取り上げる全資料についての個別の解題となっている。この部分は著者と鄭炳林氏が共同執筆した『敦煌占卜文獻叙錄』（蘭州大學出版社、二〇一四年）の「發病書」項とも重なる部分はあるが、全體的に加筆もしくは新たに書き下ろした內容が多い。また『敦煌占卜文獻叙錄』とほぼ同時期に出た王晶波『敦煌占卜文獻與社會生活』（甘肅教育出版社、二〇一三年）をはじめ、前書では取り上げられなかった先

行研究も多く用いられている。取り上げる資料もかなり増えており、『敦煌占卜文獻叙錄』では、英・佛・露・日（日は杏雨書屋本一件のみ）所藏の漢文資料のみを取り上げていたのに對し、本書では佛所藏の藏文寫本、獨所藏の漢文寫本、ヘディンコレクション中の于闐文寫本、さらには近年、著者により發見された『張天師發病書』（明淸以降の抄本）も發病書の流れを汲む文獻として載錄するなど、從來、着目されてこなかった資料も取り上げている。

また、最後の「醫療社會史視野下的敦煌吐魯番《發病書》研究」は、各資料の分析を踏まえた總論的論文であり、發病書に述べられる「疾病と病狀」、そこに反映された「病因觀」、病氣に對する「醫療手法と禁忌」などの觀點から發病書の特徵を考察する。特に醫療と占術・呪術、という二つの視座から發病書を分析している點は興味深い。たとえば病狀の描寫については、當時の「醫學の語境」、つまり醫療用語との符合を指摘する一方（六四～六五頁）、病の主な原因を①鬼神の祟り、②土木建築の禁忌の觸犯、③見舞いや弔問による疾病の傳染、の三者に整理している（六五～七三頁）。そして、治病方法については、呪符や鬼神の名前を呼ぶこと、五行相克による厭勝、人形に厄を代わりに受けさせる「代人」など、呪術的な方法が採り上げられるが、同時に「生氣が兌に在れば……鍼に宜しきも灸に宜しからず」のように、方位を占って服藥や鍼灸などの醫療行爲の宜忌を判斷することもあったことを指摘している（七九～八〇頁）。これなどは醫療と占術（術數）の關係を端的に表していると言えるだろう。以上の檢討を踏まえた上で著者は、「唐宋敦煌醫療社會史總論」と題した概論を提示する。その冒頭では、大醫となるには「須く陰陽祿命、諸家相法及び灼龜、五兆、『周易』、『六壬』を妙解すべく、并びに須く精熟すべし」という孫思邈の言葉を擧げて、改めて醫學と術數の結びつきを强調する。この考え方は、必ずしも眞新しいものではないが、一方ではやや踏み込んで、前近代社會において「①術數は醫學および醫療活動の構成要素の一つ」であり、「②術數は時に醫術の效

能を代替しており」、「③術數は病人が起死回生や健康回復の機會を得るための倫理的な選擇肢となっていた」（八一頁）とも述べている。また醫療の擔い手にも着目し、「唐宋時代の敦煌社會では少なくとも官醫・民間醫・僧侶・道士・陰陽巫師・苯教徒・景教徒・摩尼教徒・祆教徒など多數の醫療グループが活躍しており」（八四頁）、それぞれに特色があったが、共通點としては、みな「醫」と「術／ト」を兼用していたことを指摘している（八五頁）。

そのほかは、個別の資料についての基礎研究が多いが、「再論敦煌寫本《發病書》中的〝代人〟」、「敦煌術數文獻所見〝天醫〟考論」、「武威西夏二號墓彩繪板畫〝藁里老人〟考論――兼論敦煌寫本《發病書》中的〝丈人〟」の三篇では、それぞれ①生者に代わって災厄を受ける「代人」、②加害・絶命・生氣・福德とともに八卦を配當した八方位をめぐる「天醫」、③西夏墓出土の彩繪板畫に描かれた「藁里老人」と發病書中の「丈人」の關係、に焦點を當て考察している。これらはまた①辟邪、②禁忌、③鬼神に關わるテーマと、それぞれ言い換えることができるが、各論において祿命書や醫書との比較から發病書に見えるこれらの要素の特徴を明らかにしている。

校錄篇は、傳存する敦煌・吐魯番の發病書テキスト全てを載錄している。飜字に簡體字を用いる點はやや殘念だが、先行研究を踏まえた綴合・校勘・斷句は資料群を把握する上で非常に有用である。ただし、ロシア・ドイツ所藏の發病書については、岩本篤志『唐代の醫藥書と敦煌文獻』（角川學藝出版、二〇一五年）にも實見に基づく詳細な檢討があり、この成果を踏まえていないのはかなり殘念である。なお、發病書には、快癒祈願のための辟邪呪符や鬼神の圖像を載せているものが多いが、こうした圖像も全て載錄している。非漢文資料には原文はなく、先行研究による漢譯釋文を載せているが、同時に當該文獻の先行研究をなるべく網羅的に擧げており、便利である。

以上、本書の內容を簡單に紹介した。右に指摘したような問題もあるが、煩雜な發病書を非漢文占書も含めて

整理し、敦煌吐魯番社會における多様な醫療實態と合わせてその內容を讀みとくことで、その特徵や意義を明らかにした好著である。その示唆に富む考察は、術數研究と醫學史研究をはじめ、廣く社會史や宗教史、思想史などの諸分野に裨益する研究成果と言えるだろう。

最後に僭越ながら、評者の立場から若干の補足をしたい。校錄篇の末尾には、近年、著者が江蘇省徐州市の個人から入手したという近世抄本『張天師發病書』（一册、本文四葉）を載錄し、研究篇でもその重要性を强調する。著者によれば、從來、發病書や占病に當たる書物が歷代の目錄に見えないため、近代以前における發病書の存在や流行が疑われており、敦煌研究者からも、專門の書籍ではなく、雜抄寫されたものではないか、もしくは中原から傳來したのではなく、敦煌で獨自に作られたものではないか、などと考えられていた。『張天師發病書』の發見は、從來の見方に對し、發病書が專門の書籍であり、敦煌以外にも中國社會に普遍的かつ長期的に流行していたことを裏附けると著者は述べる（二六頁）。

こうした著者の考え、特に發病書が中國社會に廣く流布したことについては、評者も概ね贊同できる。ただ、それを『張天師發病書』のみに基づき主張するのでは不十分だろう。實は『張天師發病書』以外にも、類似の書名と內容を持つ『張天師法病書』や『張天師祛病書』などと言った書物が淸末に流行しており、善本書目などには載っていないものの、中國の古書市場にしばしば出品されている。最近、評者はいくつかの光緒刊本を收集したが、[1] その中には『張天師發病書』とよく似た資料もあった。たとえば『張天師發病書』は「初一日」から「三十日」までの各日毎に病氣を占うのが特徵的だが、こうした內容は、敦煌の發病書には見えない。しかし、一方で類似の內容を持つ『張天師法病書』（光緒乙未（一八九五）年刊本）や『張天師驅邪治病符法祕訣』（光緒三（一八七七）年抄繪刊本）などが傳存している。特に前者は、『張天師發病書』と比べて字句や形式も整っており、より祖本に近い可能性がある。また、さらに遡ると、明末の日用類書『五車拔錦』『不求人』『萬用正宗』などに設

けられた「法病門」の中にも、『張天師發病書』とはまた別系統の三十日毎の占病が載錄されている。このように、『張天師發病書』の背景には、明清における多樣な占病テキストの流布を想定する必要がある。

以上、評者の關心から課題を指摘したが、そもそも、從來の敦煌占書研究においては、古代の日書などと比べて、近世の占書との關係に注目する研究者はあまり多くなかった。こうした風潮に對し、本書が『張天師法病書』を取り上げ、近世の占病受容を論じた點は、敦煌占書研究に新たな展開を期待させるものであろう。

註

（1）周知の通り、現在、中國では清朝以前の文物の國外持ち出しが禁じられている。そこで當該資料の收集にあたり、浙江理工大學・張麗山氏に協力いただき、中國國內で購入・保管し、資料の檢討・整理を進めている。

（十六開、一八九頁、二〇一六年一一月、科學出版社、六十八元）